

第1部 大町ダムと防災

【コーディネーター】

山崎 登 氏 NHK解説主幹

【パネリスト】

相模一男 氏 昭和44年水害体験者

小山邦武 氏 昭和58年水害体験者

伊藤和久 氏 国土交通省北陸地方整備局 河川部長



■はじめに

山崎氏：私は、自然災害と防災を担当するNHKの解説委員で、大きな災害取材し、大きな被害を目の当たりにしたとき、過去の災害の教訓が活かされていたのか、また災害から後世に伝える教訓は何かを考える仕事をしてきた。出身は大町市である。大町ダム30周年という格好の機会に、上流から下流まで見据えた広い視野で河川全体の防災対策を見る機会を持っていただきたいと思う。

相模氏：大町に生まれ育ち、80年余、建設、土木の仕事をしている。又、大町ダム上流にある葛温泉の旅館を経営しており、昭和44年の水害を経験した。現在も規模を縮小しながらも葛温泉での旅館営業を続けている。

小山氏：小諸市に生まれ、千曲川を通じて水との関わりを持ち、下流の飯山市などを襲った昭和57年と58年の水害を体験した。当時は酪農に携わっていて、農業の被害を目の当たりにし、何とかしなければと思い、その後飯山市長として、防災の責任者の立場で災害の対策等に関わってきた。

伊藤氏：北陸地方整備局河川部長として、安全安心して暮らせるような治水事業を進めてきた。一方で、昨年9月の鬼怒川の破堤、今年の台風10号などで大きな被害が発生しており、日本をとりまく気象状況が変化しているなか、本日は防災のあり方について皆さんと考えていきたいと思う。

■高瀬川44災

山崎氏：相模さんは実際に昭和44年の水害を経験されている。どういう水害だったのか説明をお願いしたい。災害の翌日相模さんが現地で撮影した映像を見ていただきながら伺いたい。

相模氏：当日は仕事で新潟市にいて、大町に電話を入れると、高瀬川の増水により道路決壊が懸念されたため、車で葛温泉を訪れていたお客さんにはお帰りいただいたとのこと。私は電車で長野駅まで戻り、その先の電車は遅れていたため、タクシーで大町に向かった。情報が少ない中、大町は水浸しだと聞かされながら夜には戻り、葛温泉は全館流出したが幸いにも人的被害はなかったことを聞いた。また、関係者が集まり現場支援について協議し、支援部隊が翌朝現地に向かうことになった。

翌朝6:00に出発、葛温泉まで4時間かかって到着した。その時の様子を8ミリに記録した。当時葛温泉には、お客さんや従業員など50人が孤立しており、双発の自衛隊のヘリが救助に向かった。ヘリは6往復して50人の救出を無事に終えた。

44災をきっかけに大町ダム、上流には七倉ダム、高瀬ダムが整備された。後立山連山は花崗岩質で風化しやすいため、大雨が降ると土砂を含んだ水が流れ出す状況が続くが、3ダムがあるおかげで高瀬溪谷が安全・安心の地域となり、ありがたく思っている。